



新資料により被災者の軌跡を解明

第2企画展に注目しよう！

「東京空襲60年—犠牲者の軌跡—」好評開催中

間もなく“あの3月10日”の60周年を迎えます。“あの”といっても世代によりさまざまな受け止め方がされていますが、昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲から今年で60年になるのです。これに照準を合わせ、江戸東京博物館では第2企画展として「東京空襲60年—犠牲者の軌跡—」を開催中です。

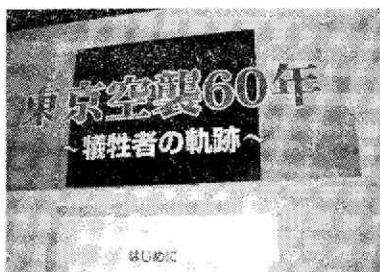
会場は5階常設展示室の第2企画展コーナーです。会場を入ってすぐ左手に、最近あらたに発見されたという資料とそれをもとに作成された遭難軌跡の地図が展示されています。およそ3時間の空爆で、約10万人の方が犠牲になったといわれるこの日、遭難された方々はどのような行

動をとったのか、その経路を地図の上に書き込んだものです。60年前という当時のことを覚えている方もたくさんおられるわけですが、会場ではこの空襲を自ら体験したと思われる人が若い世代に説明している姿が何組も見られました。

このほか犠牲者の遺品、空襲の様子を描いた絵画や写真、当時の「防空新聞」などの資料も展示され、東京大空襲の様子がよく分かります。

第2企画展は、常設展観覧券(友の会会員は無料)で見ることができますので、多くの会員のみなさんの観覧をおすすめします。4月10日まで。

【取材】文・写真：広報部会・松原良



●会員更新手続きのお願い●

友の会は会員の皆様によって支えられています。会員資格は1年です。まもなく有効期限の終了を迎える方には「継続手続きの書類」が郵送されますので、お早めに手続きをお願いいたします。

■更新しないと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

目次

◆友の会セミナー

- 「放鷹文化の再考」……………2
- 「江戸天下祭」……………3
- 「八百善の四季
“冬の味覚とおせち料理”」……………5

◆見学会：相撲史跡探訪

- 名横綱の思い出に浸る……………4

◆特別観覧会：フランスの至宝

- 「エミール・ガレ」展……………6

★えど友プラザ

- 佐藤幸彦「虎徹・兼定・菊一文字」7
- ☆江戸博クリップ 松井孝雄……………5
- ☆源内さんの江戸博さんぽ……………7
- ★えど友サークルだより……………8
- 「見付を見つけに」野坂紘子……………8
- 「落語を楽しむ」松原良……………9
- ☆会議・会合日誌……………6
- 新企画「江戸博界限—②」
吉良邸跡とどぜう桔梗家……………10
- 事業部会だより……………11
- 会員優待のお知らせ……………12

■会報〈えど友〉は、会員の皆様と友の会を結ぶ情報誌です。ご意見・ご希望・ご投稿など、ぜひお気軽にお寄せください。

放鷹文化の再考

— 日本の鷹狩 外国の鷹狩 —

講師 田籠善次郎さん (日本放鷹協会会長・第17代諏訪流鷹匠)

諏訪流のこと

諏訪流の歴史は古く、江戸時代以前、信州の諏訪大社が大本になっています。諏訪流を受け継いだ人はたくさんいます。私の師匠、16代諏訪流鷹匠花見薫もその一人です。その師匠、小林宇太郎までは、代々小林家が受け継いでできました。小林家には、後継者がなく、花見薫が受け継ぎました。私は花見薫より受け継いだ放鷹の技術を次世代へ伝承していこうとしています。

諏訪流は源平合戦に参加した、諏訪社に仕える鷹匠 (にえたか) という行事をつかさどる人たちが、諏訪一族を名乗ったのが始まりとされています。

鷹狩りの歴史

仁徳天皇 (313~399) の時代、百済からの帰化人で酒君 (さけのみ) が、天皇に献上された珍しい鳥を「百済ではこの鳥をクチと呼んで、調教すると雉 (きじ) を沢山捕る」と話したので、天皇は調教を頼みました。酒君は早速調教して、大阪の百舌鳥野で鷹狩りをして見せたのです。鷹は沢山の雉を捕りました。天皇はすぐに鷹甘部署 (たかかいべ) というものを設けました。ここから、鷹司家や犬養家がでてくるのです。

酒君が亡くなった後、百済に鷹匠の技術を伝える人を依頼します。百済から鷹匠が、技術と沢山の文献を持ってやってきました。しかし当時の人は文献を読めません。そこで判読できる人を再度依頼し、やってきたのが技術もすぐれ、文献の判読もできる兼光 (かねみつ) という人です。しかし、兼光は、4、5年たつと国へ帰りたいと言いだし、彼を引き留めるために美女中

の美女、呉竹 (こちく) を側に侍 (はべ) らせたのです。言葉の通じない人たちが文化を受け継ぐのに、女性たちが生活を共にして技術を定着させていったのです。そのことから日本人最初の鷹匠は女性とされておりま

秘薬 弟切草

昔、鷹狩りの技術は秘伝で、親兄弟にも教えてはいけないとされていました。直系の跡継ぎの長男だけが秘伝書はもらえませんでした。鷹の病気



にも神経を使い、5月頃日当たりのいい山際に黄色い花の咲く薬草を用いました。これは傷口や吹き出物などに良く効きます。今ではほとんどの薬の中に漢方薬として入っています。薬草の由来としては、花山天皇 (984~986) の頃、鷹匠の兄弟がおりました。弟が同じ鷹匠仲間の娘と恋におちました。娘の家の鷹が病気になるてしまいました。鷹は天皇からの預かりものです。見かねた弟は秘薬を教え てしまいました。娘の家の鷹の病気は治りました。秘薬を漏らした弟に腹を立てた兄は弟を切り殺してしまいます。以来、この秘薬は「弟切草」 (おとぎりそう) と呼ばれるようになりました。

鷹狩り 日本と外国

鷹匠は埴輪 (はにわ) の配列でも分

かるように権力者に近い場所にいました。私がハンガリーへ行ったときに、自分たちは鷹から生まれた民族だというプライドを持った人たちに会いました。鷹は生態系の頂点に位置している生物なのです。神との橋渡し役だったのではないかと思います。

日本の鷹匠の技術の評価は高く、大正末期に日本へきたドイツの皇帝が、小林宇太郎と会っています。そして、『芸術としての鷹狩り』という書物をだしています。この中で小林宇太郎を「世界最高の技術を持つ鷹匠」としてたたえています。また、「鷹だけは、自分の意のままにならない」とも書いてあります。鷹はアメとかムチでは調教できないのです。自分で生きていく方法を知っているからです。従って鷹の意志を大切にしなければなりません。

日本の特徴は繊細緻密 (せんさいちみつ) な狩りをする事です。宮内省では古技保存 (こぎほぞん) という意味で、徳川幕府から明治政府に変わった後、赤坂離宮、新宿御苑、浜離宮に鷹匠を残すことが明治6年 (1873) に話されました。徳川家直参の鷹匠7名を集め時期がくるまで前田藩と加賀藩にお預になり新宿御苑と浜離宮が本格的な鷹場として整備され、世界の人びととの外交場などの形で利用されるようになるのです。

ここで、カモの習性を熟知した鷹匠が、合カモ (野生のカモとアヒルの雑種) を使ってカモを誘い込みます。客は叉手網 (さてあみ) を持ってカモをすくうのです。すくえなかったカモに対しては、鷹匠が鷹を使って捕らえます。日本の鷹狩りは芸術に値するといえます。

環境問題

現代の日本では鷹狩りの場所となる里山に産業廃棄物が投棄され、生物が住みにくくなっています。次世代のためにも江戸時代のような健全な里山の復活を願って、環境の整備に力を入れねばならないと思っています。

【記録】 文: 広報部会・岡橋園子

写真: 同・斉藤美香子

江戸天下祭

講師：作美陽一さん（東京都職員）

江戸天下祭とは？

江戸時代、神田明神の「神田祭り」と赤坂日枝神社の「山王祭り」は、一年ごと交互に行なわれていました。そしてこのふたつの祭礼だけが、江戸城内まで進入を許された上覧祭りであり、いつのころからか土地っ子の誇りをこめて、『江戸天下祭』と呼ばれてきました。江戸時代の祭礼は現在と異なり、神輿（みこし）ではなく曳山（ひきやま）によるもので、神輿は明治以降に隆盛となったものです。

両祭礼（江戸天下祭）の起源は明確には分かっていません。当初は他国の祭礼形式をまねたものだったのでしょうか、はっきりとはしていません。有名な京都祇園祭がルーツという説もありますが、比べてみれば山車の形態が明らかに異なっていて、これではないだろうと思われます。

曳山の変遷

山車の形状は江戸初期から幕末まで、折々の幕府政策に左右され、かなり変化しています。従って一貫した形で伝統・継承されているわけではありません。特に享保・寛政・天保の三大改革は、そのたびごとに祭りの様式・規模などの変更を迫りました。それらを踏まえて、天下祭における山車や屋台の変遷は6期に分けられます。

◆黎明（れいめい）期（開府～元禄頃）

江戸幕府が開府され、人口がかなりの勢いで増加しはじめたころです。江戸天下祭の図としては、明暦2年（1656）に描かれた「山王祭礼図屏風」が最古のものとされ、これを検証することで後の山車や屋台などの原初形態が見えてきます。山車は一本柱吹貫型、屋台は露天型屋台や屋根付屋台がそれです。

◆前期（元禄～享保5年）

民生の安定とともに、両祭礼は全町内から山車と屋台を出すほど、盛大な行事になってきました。正徳4年（1714）には根津神社の祭礼が、江戸城内へ入り天下祭となったこともあります。ただしこれはわずか1回かぎりですが…。規模とともに様式も大型化し、山車や屋台に車輪が付いて牛が引くタイプや、太鼓山車が登場、さらに四輪付や六輪付などの大型屋台ま



で出現しました。

◆停滞期（享保6年～宝暦元年）

享保の改革により屋台が全面禁止され、それまでの華美壮大なものから、吉宗治世下では質素な祭礼となりました。これ以後江戸の祭礼には大型屋台は登場してきません。山車と屋台の歴史の中では、文字どおり新たな発展がない停滞期と言えます。

◆中期（宝暦2年～寛政3年）

新たな形態として山車は手持ち万度（万灯ともいう）型が出現しました。復古型屋台としては小型二輪付きも復活してきました。ここで幕府方針もあって、踊り屋台と底抜け屋台という、車輪がなく数人で担ぐものが主流になってきました。さらに曳物として一度限りの工作物が登場。ナマズやイノシシなど自由で大胆な造形を竹と和紙で作成しました。当然のように大型化し、長さ数十メートルになるものもありました。そして一本柱万度型山車が大発展していきましたが、寛政改革

により大幅な規制を受け、神田祭では氏子 36 町中 3 町、山王祭では同じく 46 町中 3 町のみが当番町とされて山車が許されました。

◆後期（寛政4年～天保11年）

定信の失脚後はいくらか規制も緩んで、山車は全氏子中が参加できるようになりましたが、屋台は相変わらず当番町のみ制限されていました。こうしたことから当番町に当たった町では、日ごろのうっぷんのはけ口としてか、数年に一度のチャンスには財力にまかせて、豪華な屋台や曳物を競うようになりました。このころ一本柱万度型山車の全盛期を迎えます。これら豪壮な様子は神田大明神御祭図や山王祭之図などに描かれています。

◆末期（天保12年～幕末）

屋台は姿を消し山車中心の時代、鉾（ほこ）台型山車が登場してきました。これは巨大なうえ建造費も膨大で、錦絵などに豪華に描かれています。そのレプリカが江戸博の常設展示室に陳列されています。この鉾台型山車も細部では進化をしながら明治を迎えました。

明治以降

江戸城内への通行も禁止され、天下祭（山車祭）は急速に衰退していきました。明治10年（1877）ころを最後に終息し、明治42年（1909）の深川祭りで神輿が登場したことを契機に、山車祭りとしての天下祭りは終わりをとげました。

両神社では山車祭への愛着もあり細々と続けられましたが、交通事情その他の理由もあって江戸時代に比べて小型化しました。大正10年（1921）に江戸神社（神田明神境内）祭礼で展示されたものが、最後の山車となりました。一昨年江戸開府400年祭では、江戸を離れ地方へ散っていた山車が、久しぶりに参集しました。現存する江戸曳山としては、栃木市倭三丁目や加須市本町などに細々とあるだけで、ほとんどは震災と戦災により失われました。

【記録】文・写真 広報部会 稲垣武志

小春日和の午後、名横綱の思い出に浸る

——相撲史跡探訪 その1——

台風22号のために延期されていた「相撲史跡探訪」は、絶好の小春日和の12月11日午後に実施されました。参加者は約30名で、予定より少なめでしたが、狭い街路を連れだって歩くのには、ちょうど良い人数でした。趣旨は両国国技館を起点としてかつての名横綱などの相撲関連史跡を訪ね、国技相撲を再認識したい、というものです。

主な見学先は相撲博物館、野見宿禰神社、錦戸部屋、徳之山稲荷、蔵前国技館跡、蔵前神社、樗寺(かやでら)(安芸の海の墓)、竜宝寺(千代の山の墓)、本法寺、敬覚寺(羽黒山の墓)などでした。コースは江戸の下町なので、相撲に関係するスポットも多くあります。蔵前神社はむかし力士谷風梶之助や雷電為右衛門などが活躍した勧進相撲の場でしたし、蔵前の東京都下水道局の大きな施設は、現在の両国国技館の前に、国技館のあった場所です。

相撲部屋も錦戸部屋(元水戸泉)に行けば、隣は八角部屋(元北勝海)で、その先少し歩くと伊勢が浜部屋(元清国)、というぐあいに予定になかったスポットにも多く出会いました。蔵前神社では宮司さんから神社の歴史の講話をうかがい、樗寺では、女性の住職さんが樗寺縁起の絵解きをして下さいました。

この日のテーマに挙がったかつての名横綱、羽黒山、安芸の海、千代の山について、案内者の説明や参加者のお話に私の思い出をまじえて以下まとめておきます。

羽黒山は新潟県出身で、両国の銭

湯の従業員だったのを立浪(元小結緑島)に見出されて双葉山、名寄岩の弟弟子として入門、序の口から入幕まで連続して優勝した、スピード出世の記録保持者です。大関時代の彼の浅黒い胸板は、まさに金剛力士のようで、しばしば鋼鉄の櫓(やぐら)にたとえられたものです。彼の



上位には双葉山が君臨していて、当時は優勝決定戦がなく、同成績の場合上位者が優勝となるため、たびたび彼は優勝を逸しました。それでも優勝7回、引退近くにはアキレスけん断裂2回の不運に遇いましたが、その後も37歳で15戦全勝をなし遂げるなど、真に大剛と言うにふさわしい横綱だったと思います。彼が初優勝をかけた千秋楽の一番の直前に実況放送のアナウンサー和田信賢が、兄弟子の双葉山と同成績のために羽黒山が何回涙を飲んで来たかを語り、この一番を羽黒に勝たせてやりたい、と熱弁をふるったのにはホロリとさせられた思い出があります。

羽黒山の墓は、昭和19年に彼自身が建立したものが、敬覚寺にあります。彼は昭和19年に愛妻と愛嬢を病気のため相次いで亡くした由で、その時「小林家之墓」を作ったのだと思います。彼自身は引退後には立浪親方として協会理事も勤め、昭和44年10月14日、54歳で没し

ました。

69連勝を記録した双葉山を昭和14年1月場所4日目に外掛けで破った、出羽の海部屋の平幕(当時)安芸の海は、その後順調に出世して昭和



17年5月場所後に照国と同成績で横綱に推挙されました。この兩人も既に横綱として常勝双葉山と羽黒山がいたため、優勝は難しかったの

です。安芸の海は、苦手のない相撲巧者で、筆者の記憶では、下位力士に対する取りこぼしが全く無い人でした。双葉山に対しては有名なあの一番の外には全く歯が立たなかったということです。彼は引退後年寄り藤島として理事も務めました。その後廃業、昭和54年3月25日に64歳で没しました。墓は樗寺にあり、表に「永田家之墓」側面に、「卅七代横綱安芸の海節男の墓」と彫られています。

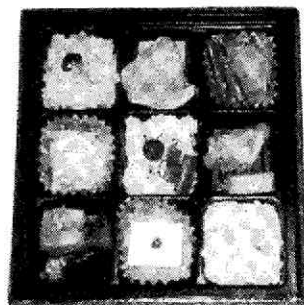
千代の山は、はじめ実名の杉村を四股名(しこな)としていましたが、既に三段目の頃から猛突っ張りの大器として、ファンの間で騒がれていたものです。19歳で入幕し、期待通り横綱となつてからは、組んでも左からの強烈な上手投げなど、豪快な取り口を見せました。しかし不調の場所も多く、昭和28年には横綱返上を申し出て、もちろん認められなかったのですが、角界を騒がせたものです。昭和34年1月場所後に引退して年寄り「九重」を名乗りましたが、「分家独立を許さず」を守ってきた出羽の海部屋からの独立を申し出て破門の扱いを受けながら九重部屋を創立し、千代の富士の師匠北の富士を育てました。彼の没年は昭和52年、享年51歳でした。彼の墓は蔵前の竜宝寺にあります。この日、寺は留守で、残念ながらコースから割愛されました。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

八百善の四季 “冬の味覚とおせち料理”

——江戸料理と料亭歳時記——

講師 栗山善四郎さん (八百善10代当主)



今の神田付近から八百屋として創業し、改革、天変地異、大火、戦火など幾多の困難に遭いながらも、時折々に酒井抱一、亀田鵬斎、太田蜀山人、谷文晁などの文化人や明治大正の高名な方たちとの交流を通じ日本料理の食文化の担い手として現在に至っています。エピソードも多く、1両2分の茶漬け、ペリー来航への供応等枚挙にいとまがありません。現在も創業時からの絵、軸、什器が多数残っています。今日の折詰め、掛紙の絵も国芳のもので、“割烹家八百善”の文字がとてみずです。

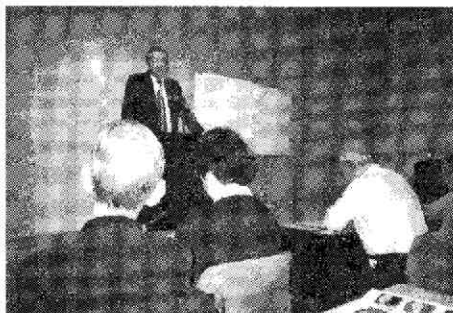
2箱の折詰め、江戸弁で講演される御当主の話を堪能させていただきました。江戸料理職人の確かな技と味を家人にも味あわせて持ち帰り、これまた堪能いたしました。

【報告】文・写真：事業部会・山口千恵子

おせち(御節)とは正月や節句の料理で、節目節目に天変地異への心がまえをつくり、神仏に対する祈願の気持ちを込める等、家々で作るものが昔からの本質です。料理屋が売るものではなかったのです。現在“懐石料理”とありますが、これは本来御茶事の料理です。温石(おんじょく)を腹で暖めるのと同じように腹中を暖め空腹をしのぐもので、茶人またはその家族が自ら作る料理ですが、これも昨今本来の意図から外れています。

現在食礼という食事の際の礼法がなくなりました。八百善では8代目が武家出身で彰義隊を輩出した家から来た人だったため、みんな厳しく教えこまれました。広重の絵に将軍がしきりにとらわれず台引の上に置かれている料理を食する様子が残ってお

り、家成が鷹狩りの帰りに八百善に立ち寄ったという文書も残されています。



八百善のおせちは25品目、甘い、塩からい、酸っぱいのバランスをとり、日持ちをよくするため味を濃くし、また手間を十分にかけて江戸料理真髓の技がさえているのが特徴です。黒砂糖で煮付けた初午のお稲荷さん、山王祭に食した鰯のたたき等、自分の幼少のころの思いがこもっているのです。



江戸博クリップ

江戸東京博物館は、「日本的高床式の倉をイメージ」した特殊な建築物である。高額な電気料金を消費する大規模施設である。一方、雨水をトイレの洗浄水に使用し、地震の「ゆれ」が展示物への影響を緩和する制震装置を設け、1階エントランスホール床下に2,000 m³の蓄熱槽を設置して省資源・省エネルギーを図っている。

蓄熱槽は、展示物を快適な環境の下で観覧して、多数の収蔵品を良好な状態で保存・管理するに不可欠な空調和機の付帯設備である。安価な深夜電力を使用し、主に昼間の時間帯に使用される。このため、江戸東京博物館の

大幅なコスト削減に貢献している。蓄熱槽の熱源水は、ヒートポンプにより製造される。かつてヒートポンプの伝熱管が腐食し、冷媒ガスの漏洩(ろうえい)により冷凍機が運転不能になる事故があった。このため、①伝熱管の洗浄 ②渦流探傷検査 ③水質分析を実施し対処した経緯がある。

施設管理と健康診断

管理課 技術専門員 松井孝雄

職場では、この時期、身体の異常を早期に発見するために定期健康診断が行われている。このことは、設備機器類についても同様に重要である。

五感(視・味・聞・臭・触)による日常点検や専門業者による精密点検を、

定期的実施してかつ継続することが、施設を維持・管理するうえで重要である。小さなトラブルが機器の停止を招き、多額の修理・整備費用を必要とするものである。保全業務を怠ること無く精度の高い点検を実施することが、機器の能力低下や事故を未然に防止し、被害を最小限に抑えることになり、結果的に耐用年数の延命につながるのである。従って、良好な博物館の運営が可能になり、施設の安全な管理が確保される。

私は、メーカーやメンテナンス業者の協力を得て、職場の「裏方」として、早や6年も管理係でお世話になっている。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や技術専門員などの館職員の方に執筆をお願いしています。

工芸家から芸術家への歩み

企画展 フランスの至宝—エミール・ガレ展

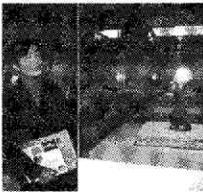
1月26日、江戸東京博物館・企画展示室で、エミール・ガレ展の特別観覧会がおこなわれました。学芸員の橋本由起子さんの解説でガレの世界を堪能しました。

ガレは2004年9月23日で没後100年を迎えました。それを記念して、ヨーロッパや日本でも相次いでガレ展が開かれましたが、江戸東京博物館の展覧会はその締めくくりとなるものです。

展示品は全部で210点ほどで、その内の過半数が今回初公開となる作品です。海外からは36点来ていますが、これもその過半数が日本初公開です。代表的なものが、ロイヤルコレクションで、エルミタージュ美術館に所蔵されている花器<トケイソウ>とか、デ

ンマーク王室からガラスのコレクションが6点も来ています。

奥の展示室に、彫刻(手)が展示されています。ガレは、彫刻(手)を3体残しています。



1体は今回オルセー美術館からお借りした物。あとの2体は、フランスのナンシー派美術館にあり、これは門外不出になっています。

初期のガレでは陶器が紹介されています。ガレの父親、シャルル・ガレは陶器やガラス器の販売業を行っていました。ガレは高等学校卒業後に父の工房に入って、陶器の絵のデザインなどをしていました。ユーモアあふれる

作品に思わず見とれてしまいます。1867年、1878年のパリ万国博覧会で日本の美術品が広く紹介され、ヨーロッパの芸術家たちは刺激を受けました。ガレもその影響を受けたひとりと言います。展示品の中に『北斎漫画』からモチーフを借りた物があります。ガレは中期に入って、象徴主義を取り入れます。象徴主義とは、目に見えない人間の内面世界を、静物や動植物など、あらゆる物で象徴するものです。展示品の中のたばこ入れには、ガレの妻、アンリエット・ガレの詩が刻み込まれています。このような夫婦の合作も残っています。ガレは作品にいろいろなメッセージを込めました。ガレはナンシーに留学していた、高島北海という日本画家の墨絵に驚かされます。ガレは北海の絵を2枚所有していたと言われます。黒色のぼかし方が墨絵に似た作品があります。家具にも日本の浮世絵の影響が見られます。ガレの素晴らしい作品の数々をお楽しみください。

【取材】文：広報部会・岡橋園子

写真：同・松原良

会 議・会 合 日 誌

2004/12/1~2005/1/31

◆役員会

12月9日(木) 18時から開催。各部会報告のほか、ホームページのためのインターネット契約締結について事務局から報告があった。また広報用のPR版が披露され、入会勧誘に活用することとした。出席9名。

1月13日(木) 18時から開催。各部会報告のなかで、会報「えど友」の版下制作外注化時の予算面の考え方などを話し合った。出席10名。

◆役員候補者推薦委員会

12月2日(木) 16時から開催。役員候補の公募結果として自薦2名、他薦2名を確認し、面接日を決定した。また現役員6名より留任承諾を得たことを確認した。しかし人数としてはまだ不足のため改めて各部会からの推薦を依頼することとし

た。出席9名。

12月17日(金) 13時から委員長および各部会1名の4名で、自薦他薦の4名と個別に面談した。その結果、自薦の1名から取り下げの申し出があり、3名を推薦することとした。

1月31日(火) 16時から開催。会長から各部会からの推薦者6名の通告があり、これを確認し、委員会として全15名を推薦することに決定した。出席9名。

◆事業部会

12月2日(木) 18時から開催。11月セミナー、見学会の報告のほか、12月事業の確認、担当の決定、来年度予算編成方針についての意見交換などを行った。出席17名。なお会議終了後「東京モダン亭」にて忘年会を行った。

1月6日(木) 18時から開催。12月セミナーの報告、3月までの事業

の確認、担当の決定のほか、4月から5月の予算決定前の事業のあり方などを話し合った。出席18名。

◆広報部会

12月23日(水) 15時40分から開催。「えど友」第23号の反省、第24号の内容と分担などを話し合った。出席9名。なお、部会に先立ち、来館者への「えど友PR版」の配布を90分にわたって行ったほか、会議終了後「ビヤステーション両国」で忘年会を行った。

1月19日(水) 15時から開催。「えど友」第24号の進行状況の確認、版下制作外注化の条件、来年度事業計画などの検討を行った。出席7名。

◆総務部会

12月24日(木) 13時から「えど友23号」などの発送作業を行った。出席8名。

～友の会会員の投稿欄～

えど友フラガ

虎徹・兼定・菊一文字

佐藤 幸彦

近藤勇、土方歳三、沖田総司所用の刀の作者は、近頃それぞれ虎徹・和泉守兼定・菊一文字ということになっています。

虎徹は近江の長曾祢村の出身で、50歳の頃江戸に行き、刀鍛冶として寛文・延宝頃（1670年前後）に活躍しました。その作品は切れ味の良さによって彼の生前から大変な人気があったということです。それだけに偽物を作る悪いやつも多く、彼の孫は虎徹の作品の真偽を見分けることで生計をたてていました。今でも有名画家の一族の人が、その画家の作の真偽の鑑別を生業としている例が良くありますね。近藤の刀は無銘で、偽物であったとしばしば言われます。偽銘が彫ってあれば偽物ですが、無銘なら偽物とは言えません。しかし虎徹の真作に無銘のものがあるはずもないので、その刀は虎徹の作ではないと思います。自分の刀は無銘だけれど「虎徹だ!」と、信じることによって近藤は一層の勇気がわいて大活躍をしたのだ、とすれば近藤にとっても、虎徹にとっても幸せなことです。近藤の刀は二尺三寸五分（刃の長さ）だったとも言われています。この長さは江戸時代の太刀の定寸です。近藤ほどの剣客が命を懸けて闘う時は、二尺八寸位のものを携行しても良いと思うのですが、あるいは屋内の闘いを考えて短めのを使用していたのかも知れません。江戸時代でも例えば荒木又右衛門の伊賀越仇討、赤穂浪士の討入りの時など、いざ闘いという時には、二尺八寸級の長い刀が使用されているのです。

土方歳三は業物で名高い美濃の刀工、和泉守兼定を刀屋から入手して愛刀にしていたと言われます。兼定という刀工は、室町時代末期の美濃に何人か居たのですが、「定」の字の中の「疋」を草書風に「之」と書く作が通称「之定」（のさだ）として珍重されました。土方の遺品の兼定刀は銘が之定風ですが、江戸後期の作で、美濃の兼定が江戸初期に会津藩の藩工となり、それが何代も続いたいわゆる「会津兼定」の作で、之定ではありません。質実剛健な会津の刀工の作の方が美濃の古作よりも実用的だったと思います。新選組は会津藩の配

源内さんの江戸博さんぽ その3



下にありましたから、土方が会津兼定刀を会津藩主から拝領したとしても不思議はありません。土方が之定に憧れて、刀屋に注文して入手した話は、小説家が彼の遺品の（会津）兼定を見て思いついたことではないかと思います。

沖田総司の菊一文字は、近年になって急にご婦人方の間に彼の人気が高まり、彼の刀も虎徹・之定の向こうを張れるものでありたいという願いから、小説家が創作したものと思います。「菊一文字」というと、包丁と間違える人もあるかと思いますが、福岡一文字派の祖、則宗という人が、後鳥羽上皇が自ら刀を鍛えた時の師になり、銘に菊花と一の字を刻することを許された、と言う伝説があるのです。しかし実際に菊一文字の作は希有で、もし現存したとしても、到底、新選組の実用に耐えるものではありません。

8代將軍吉宗は享保4年(1719)に全国の諸藩に領内の刀工の名を報告し、作品を提出するよう命じました。その時、越前福井藩主松平伊予守からの報告に「菊御紋一文字」という刀工の名が挙がっています。この程度のものなら沖田総司が持っていたとしても変ではないが、小説家がこの刀工を思いつく可能性はないと私は思います。沖田の刀の作者は謎です。

(この稿はテレビ視聴者を惑わせることを避けて、年明けにお届けすることにいたしました)。

えど友④㊦㊧㊨だより

会員の自主的サークルとしての「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

江戸の理解を深める会

◆1月26日(水)に第3回会合を開催。前回に引き続きテーマの話し合いを行ったほか、今回は大渡真司さんから「江戸時代の五大改革」について資料提示と説明があり、質疑応答を行った。参加者5名。

江戸三十六見付を巡る会

◆1月22日(土)に第2回の見学会を開催。前回の筋違見付を受けJR御茶の水駅を起点として、お茶の水記念碑、現代教育発祥の地碑、聖橋、湯島聖堂、神田明神、東京都水道歴史館、神田上水懸樋跡碑、水道橋、三崎稲荷神社を巡り、小石川見付までを約3時間かけて歩いた。参加者12名。なお、終了後有志が喫茶店で懇談した。

落語・講談を楽しむ会

◆12月23日(木・祝)に第2回会合を開催。今回はテーマを「深川を散歩して落語を聞く」とし、富岡橋、伊能忠敬住居跡、小津安二郎出生地、三十三間堂跡などを巡り、法乗院えんま堂・深川不動・富岡八幡宮参拝と深川門前仲町周辺を散策した後、古石場文化センターの落語会「RAKUGOもんすたあず」に参加した。落語「文七元結」、「湯屋番」、「粗忽の釘」、「壺算」を鑑賞した。参加者6名。

◆1月25日(火)に第3回会合を開催。今回のテーマは「落語を聞いて亀戸天神初詣」。まず前回の補足説明(髪結新三と文七元結)のあと、歌舞伎「梅雨小袖昔八丈〜髪結新三」、落語「初天神」(柳家花緑)、同「五百羅漢」(三遊亭円窓)をビデオ鑑賞。昼食後、葛飾北斎生誕の地、野見宿禰(すくね)神社、津軽屋敷跡、河竹黙阿弥終焉の地、三遊亭円朝居住跡、五百羅漢寺跡、栗本鋤雲(じょうん)住居跡、法恩寺などを巡り、「うそかえ」神事の行われていた亀戸天神の初天神へ。参加者8名。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集中です。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名、④住所、⑤電話番号、⑥Eメールアドレスをご記入の上、友の会事務局へお申込みください。申込先 130-0015 東京都墨田区横綱 1-4-1 江戸東京博物館友の会事務局 Tel. 03-3626-9910

●新規サークルを設立される方も募集しています。ご希望の方は事務局(上記)まで関係資料をご請求ください。

江戸三十六見付を巡る会

見付を見つけに

野坂 紘子

えど友サークル「江戸三十六見付を巡る会」の最初の見学会が昨年11月23日にありました。

まず江戸博に集合、そこで発起人の小笠原さんのレクチャーを受けたあと、回向院・両国橋・柳橋・浅草見付・柳森神社・筋違見付など15箇所を巡りました。参加者は18名、友の会としては女の方が多いように見うけました。回向院にちょっと寄って両国橋へ。隅田川の川面がお日様の光を受けてキラキラと輝き、釣人の姿も見えます。

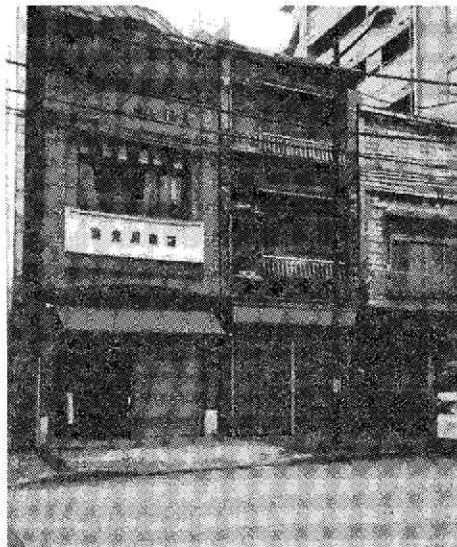
この橋は徳川家綱治下の万治2年(1659)に架けられ、武蔵と下総を結ぶ大らかなどうどうとした橋です。当時の橋は50mほど場所がずれているそうですが、さぞかし立派なものだったでしょう。川を渡るとすぐに柳橋。緑色の小さくてきれいな鉄橋です。柳がそよぎ、屋形船がもやっている風情のある場所です。橋のたもとにある佃煮の小松屋さんの店先では冬季限定のカキや江戸前穴子、小ハゼなど季節の味がおいしそうに並べられています。



奥州街道へ通じる浅草見付は、なんと言ったところですが、現場に立てただけで満足です。関東郡代屋敷跡の横には交番があり、カンロクある太目のおまわりさんに道を尋ねました。左衛門橋や藤堂和泉守ゆかりの和泉橋、その下は神田川で、しゃれたビルが並ぶ華やいだ一角です。

既製服問屋発祥碑をとって柳原土手跡へ。どこが?とほんとに見逃してしまいそうです。歴史に詳しい方から、お玉が池道場へ通じる道路のことなどを聞きながら、さらに歩いてゆくと、ひょっこりと銭形平次親分が現われそう。私が気に入ったのは柳森神社です。おたぬき様がまつられていて、女の出世に霊験・ご利益があり、奥女中たちの信仰を集めていたそうです。境内には力自慢たちが競った力石や富士塚もあり、黒い溶岩が積み重ねられています。そして交通博物館そばの筋違見付、中山道

への出入口です。れんが壁にお成道と書かれた古ぼけたプレートがあるだけですが、江戸時代にはもっとも賑わった場所の一つだったそうです。今はなにもありませんが、私にはふっと歴史を呼び起こさせてくれる、妙に心引かれる所でした。



オマケは青果市場跡、このあたりは戦災に遭わなかったそうで、超レトロの看板建築も数軒残っていて感激でした。石碑のとなりでは江戸っ子美人おばあさんが、いろいろと説明してくれました。それによると、この辺りは10年ぐらい前までは、青物屋さんが軒をつらねていたそうです。今でもわさび漬店だった家があり、黒い瓦屋根の重厚なたたずまいを残しています。ここから白い装束の若い衆が、掛け声とともに江戸城のお台所まで、野菜などを届けたのでしょ。それはつい何百年か前のこと。さてここで本日の見付巡りはおわり。おそばを食べようと近くの「まつや」へ寄ったらあいにく休み、「庄之助」でゴマ大福とお赤飯を買って、秋葉原の駅へ向かいました。良い一日で、大だぬきに化かされて江戸の昔へ行ったみたいでした。

落語・講談を楽しむ会

凝った企画で落語を楽しむ

松原 良

えど友サークル「落語・講談を楽しむ会」の第3回に参加しました。本稿はそのレポートです。

まず世話人の鈴木さんから手渡されたのがA4版10頁にも及ぶこの日のレジュメです。カラーコピーの「本所絵図」(嘉永5年)までついています。ビデオ鑑賞をする歌舞伎の「髪結新三」(落語にもある)、落語「初天神」「五百羅漢」のあらすじや演者の紹介もあり、それを手にしながらビデオを見ました。

このビデオもただ漠然と3本あるのではなく、最初の

「髪結新三」は前回ともつながりがあって、深川界隈を散策したときに行った「えんま堂」が歌舞伎の舞台に出て来たりするのです。

2 本目の落語「初天神」はもちろんこの日のメインテーマ、亀戸天神への初詣と展開するのですが、もう1本の落語「五百羅漢」はこのあと歩くコースに「五百羅漢寺跡」があって、今は目黒にある五百羅漢寺が明治20年(1887)から同33年(1900)までの間ここにあったとい



う話につながるのです。この構成をみても、とても“凝った企画”であることが分かります。

さらに午後の部、江戸博から亀戸天神への散策ですが、このコースも実に丹念に調べてあって、レジュメにも詳しい説明が載っています。江戸博を出発してほどなく着いたのが野見宿禰(すくね)神社。相撲の会でもないのにとしたら、何と野見宿禰は相撲の神様・元祖というだけでなく「埴輪(はにわ)」の発明者であり、たどっていくと菅原道真つまり天神様は野見宿禰の末裔(まつえい)なのだそうです。いままで気付かなかったのですが、この神社の紋は天神様と同じ梅の紋なのです。

と、この企画の凝りようは相当なものです。五百羅漢寺跡は標識も説明板もなく、番地からここにあったはずだというだけなのですが、そんな所を探し出すのもまたすごいことです。亀戸天神が初天神の日で賑わっていたのはもちろんです。ただ一つ惜しかったのは参加者が少なかったことで、今後みなさんも参加してみてもいいでしょうか。

***** こんな会もありました *****

会員の松本慶三さんが独自に蔵元に作らせている日本酒(「にぎり酒」と「自画自賛」)を、見学会などでおな



じみになった玉木達二さんに持ち込んだのが発端でした。では、とお酒の好きそうな会員に声をかけ、1月27日(木)に15名ほどの会員がレストラン「モア」に集まり、おいしく賞味しました。博物館からは展示営業

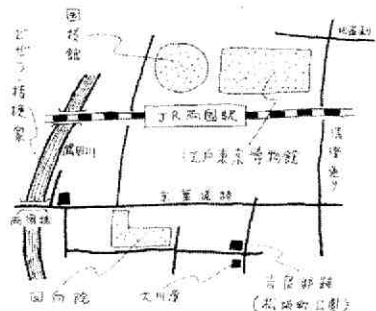
係長の江里口友子学芸員も参加してくださり、楽しいひとときを過ごしました。

■お詫びと訂正 前23号の「第22回友の会セミナー」の本文末尾、「【記録】文・写真」とあるのは「【記録】文責・写真」の誤りでした。また、「事業部会だより」の第28回友の会セミナーのタイトル「東海道五十三次「山あり谷あり」」は「東海道五十三次「山あり川あり」」の誤りでした。お詫びして、訂正いたします。

ちょっと寄ってみませんか

江戸博界限②

吉良邸跡と桔梗家（どぜう）



吉良邸跡（区立松坂町公園）

わずか30坪（約97㎡）足らずのこの小さな公園は、元禄15年（1702）、赤穂浪士が討ち入りをかけた吉良上野介義央の屋敷跡の一部でした。高家の格式を表す白いなまこ壁長屋門造りになっており、脇のくぐり戸から中に入ります。当時の敷地は2557坪（約8400㎡）、内側の壁面に掲示された吉良邸の図面を見ると、その広大さが察せられます。公園内には吉良邸にあった稲荷が遷座（せんざ）され、上野介の首を洗ったと伝えられる井戸が残っています。また小林平八郎、清水一学など吉良家家臣追慕の碑もある一方、浅野家家来口上書や大石内蔵助以下36名の署名義親類書など、赤穂浪士関係のものも掲示されています。

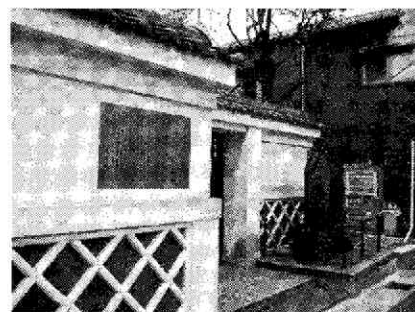
ここ本所は、明暦の大火（1657）後の江戸拡張により、本格的には元禄の初め頃から武家屋敷が移転されたところ。上野介は刃傷事件のあと屋敷替えとなりますが、それまでの江戸城に近い呉服橋御門内の屋敷を思えば、まだその頃の本所は新開地、心ざびしいものであったことでしょう。

幕府は討ち入りの翌年2月、赤穂浪士に切腹を言い渡し、同時に吉良家も養子の義周（よしちか）は信州に配流、領地は没収されます。ここが吉良邸であったのはわずか1年半、屋敷は取り壊され、やがて町人地となりました。本所松坂町の誕生です。

昭和4年（1929）、町名が松坂町から東両国に変わりました。忠臣蔵の舞台に愛着をもち、歴史的な松坂町の名を

惜しむ地元の人々は、遺跡を後世に残そうと石碑を建てます。2年後には有志が資金を出し合って土地を買い、昭和9年（1934）、東京市へ寄付。昭和25年（1950）、墨田区へ移管され、公園となりました。

こんな話も聞きました。昭和4年（1929）といえば金融大恐慌のあった年です。世間には不安な空気が色濃く流れていました。そんな中、この町で自殺者が続きました。この頃、忠臣蔵は忠君愛国と結び付けられ、吉良上野介は徹頭徹尾憎まれ役でした。表だって上野介のことは言えない雰囲気でしたが、「吉良さまを放っておいたのがいけないのでは」というつぶやきの声があがりました。それが土地購入の一つのきっかけになったというのです。



この吉良邸跡に多くの人が訪れるようになったのは、平成11年（1999）のNHK大河ドラマ「元禄繚乱」（当時・中村勘九郎主演）放映の頃からといます。吉良上野介が領地の愛知県吉良町では名君といわれていることや、いろいろな研究から上野介に対する見方が近年変わってきたことが原因のようです。

公園のすぐ前、元吉良邸の敷地内に吉良まんじゅう（1個190円）と名づけた和菓子屋を売る大川屋があります。きな粉を混ぜた白あんで、口に入れると淡い甘さにきな粉の香ばしさがほのかに漂う焼き菓子です。明治2年（1869）創業の老舗ですが、吉良まんじゅうを始めたのは10年ほど前から。

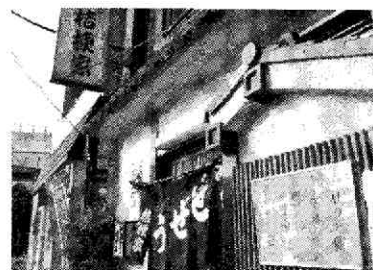
江戸博から徒歩約9分、墨田区両国3-13-9。

◆参考：友の会セミナー「古文書で読み解く忠臣蔵・その2」（講師：佐藤孔亮さん）3月5日（土）14:00～15:30

江戸博1階会議室で開催します。

どぜう・桔梗家

どじょう料理の専門店が都内に5軒、すべて下町にあります。その中で桔梗家（ききょうや）が一番新しく、創業は昭和8年。店は昔ながらの座敷で2階もあり、時にお相撲さんも訪れます。



どじょうを初めて食べるという人は、ぬき（頭と骨を抜き、開いたもの）か柳川（ぬきの卵とじ）にするのがよいとのこと。丸は、どじょうを姿のまま骨ごと食べますが、骨も軟らかく本当のうまさは丸だといえます。

実際にぬきで鍋を食べてみました。新鮮なさがきごぼうがよく合い、あっさりとした味付けで、臭みが全然なく食べやすい。刻みねぎをたっぷり入れるのがコツだそうです。

他にうなぎ、こい、なまずもあります。すべて生簀（いけす）で生かし、生きたものしか使いません。また、どじょうもこいもうなぎも、みな国産ものです。

どじょうは通年ですが、おいしいのは夏。その卵も食べられ格別です。なまずは11月から3月までしか扱いません。こいも冬ですが、意外なことに、うなぎは秋がうまい、とご主人は言います。

どじょう鍋（ぬき）（柳川）1200円、うなぎ・きも吸付き 1150円～、なまず鍋 1600円。こいこく 400円、ランチのうなぎ、どじょう丼は1000円。昼食は100円のチケッスをくれます。

定休日は日曜、祭日。ただし両国国技館で本場所のあるときは、休日も夜のみ営業。昼 11:00～14:00、夜 16:30～21:00。

江戸博から徒歩約9分。墨田区両国1-13-15、電話 3631-1091

【取材】文：広報部会・大野晴美

写真・地図：同・松原良

講座のお申込方法

友の会セミナー

見学会

見学会

古文書講座

見学会

11

